View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

新出連歌資料 「(仮題) 天文三好千句三つ物」

著者	鶴崎 裕雄
雑誌名	國文學
巻	83-84
ページ	266-280
発行年	2002-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/2499

新出連歌資料「（仮題）天文三好千句三つ物」

鶴崎裕雄

千葉県銚子市の円福寺（住職平幡良雄師）には、三好長慶・宗養・昌休・寿慶らによって天文二十年（一五五一）六月十日から始まった千句三つ物一巻が所蔵されている。この千句の内、第三と第五・第十の百韻が宮内庁書陵部にあり、同じく第五の百韻が兵庫県伊丹市の柿衛文庫にあることは、すでに奥田勲氏の「連歌作品年表稿」[1]や木藤才蔵氏の『連歌史論考』[2]、連歌総目録編集会編『連歌総目録』[3]などに紹介されている。

円福寺蔵の千句三つ物については、平成十一年十月、当時千葉県史料研究財団にご勤務の外山信司氏よりお教えいただいたので、機会があればぜひ現物を拝見したい旨お願いした。幸いにも昨年（平成十三年）三月末日、外山氏や千葉県史の文献調査の方々に従って円福寺に伺い、千句三つ物を拝見することができた。

戦国武将、三好長慶が関わった千句には、弘治二年（一五五六）七月の「滝山千句（三つ物）」[4]と永禄四年（一五六一）五月の「飯盛千句」[5]がある。この二つの千句はそれぞれの興行場所を冠した名称である。しかしここに紹介する円福寺蔵の三つ物千句の興行場所は不明である。また天文年間には、天文三年の「宗祇三十三回忌追善千句」や天文六年の「伊予千句」のほか、天文二十四年の「梅千句」など、多くの千句連歌がある。これらを勘案して、今、仮に「天文三好千句三つ物」と呼ぶことにする。

円福寺蔵「天文三好千句三つ物」は、巻子一軸、縦一七・二cm、横四五七・二cm、表紙は二五・四cmの薄茶色幾何学模様絹織、見返は金泥に折柴と砂子散模様。千句三つ物は楮紙一〇二・四cmに書かれて、ちょうど半分の五一・二cmの所に継ぎ目がある。本来、横折の懐紙表裏を切断して継いで、巻子に仕立てたものであろう。三つ物の最後に「紹巴」とあるように、室町時代の書写であろう。堂々とした、力のある書体である。宛先の「たいこ　宗弁和尚」は山城国醍醐寺の僧であろうか。[6]

面白いことに千句三つ物に続いて、風景画が付けられている。絵は絹地に彩色墨二九〇・二cm、途中一個所に継ぎ目がある。絵の描かれた絹地の後、三九・二cmの遊紙がある。

円福寺は奈良時代以前に創建されたという。明応年間（一四九二～一五〇一）全恵により中興。本尊は十一面観音。坂東三十三所観音霊場の一つで、飯沼観音として知られる。

円福寺には千葉胤将安堵状・徳川家康安堵状など円福寺文書として多くの文献史料がある。しかし「天文三好千句三つ物」は、円福寺に伝来した文書ではなく、先代住職が入手されたものである。現住職平幡良雄師は、目下収蔵庫を建設中で、近い将来、資料館の開設を計画されているという。

天文廿年六月十日

三好筑前守殿興行

何路

くるとあくといつれか千入花の色　長慶

月にかすみの匂ふ山のは　寿慶

とふ雁のは風の名殘雪散て　宗養

何人

月見えてたゝはたゝなん夕霞　昌休

波にうかへる春の河上　慶牧

柳かけ氷し水もみとりにて　宥松

何舟

つけのこせ春暮かたのかねの声　正悦

夢路□[し]花の曉の空　玄哉

真木の戸の月に鶯鳴いてゝ　末満

何木

高根こせさそふ雲あらは時鳥　永薀

やゝ五月雨の夜はのしのゝめ　底閑

おき出る道も露けき旅にして　覚阿

初何

山風やうすらひむすふ夏の海　宗養

磯の玉藻に波のみるふさ　昌休

舟よする真砂の松はかけ暮て　長慶

山何

あき萩はさながら春のにしき哉　正種

こてふとひかひ野はむしの声　紹巴

うす霧に入日のしはしやすらひて　慶牧

一字露顕

月やとす衣てなれや秋の雲　寿印

ゆふへそ風の音も露けき　永蘊
松むしのかけにすゝしく啼初て　寿慶

何色

鹿の音をつるゝやいはゝ初嵐　底閑
時雨にうつる秋の山本　正種
瀧波はせゝこす夕霧こめて　理文

何垣

咲をみよ冬とはえやは宿の梅　慶牧
松は軒はに雪高き比　宗養
雲の下に嵐の音はしつまりて　正悦

御何

松の世をつもりの浦の深雪哉　寿慶
寒てしつまる波風の声　長慶
春にけふ空や千里も明ぬらん　昌休

追加

蝉の声袂にうつるは山かな　玄哉
日も夕立の軒ちかき空　有松
萩のはのしけりの露に風過て　家順

林鐘廿八　紹巴（花押）

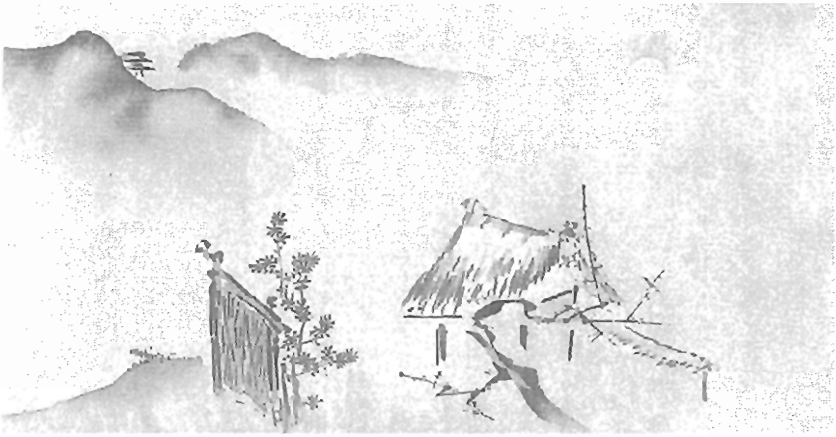
たいこ

宗弁和尚

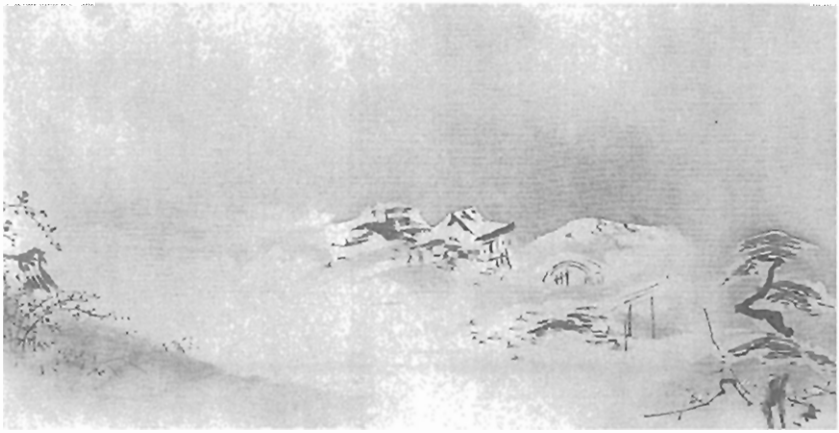
吟窓下

千句三つ物に続いて、次ぎのような、各三つ物の発句・脇・第三句の内容を描いた風景水墨画が続く。

（一）遠山の桜　山の間に望月　麓にも桜　帰る雁が左へ
（二）霞にけむる青柳と流水　左上の川上は波立つ急流
（三）藁屋の軒端の梅に鶯　粗末な門戸の側に槙　月と遠山の寺院
（四）山の頂を遙かに越えて飛ぶ時鳥　道を行く人物
（五）浜辺の松　小舟　海中の岩に寄す波
（六）紅白の萩に白い蝶　霧間の入り日
（七）叢薄に虫（松虫）　薄の向こうに低い月
（八）山の紅葉に小さく描かれた鹿　麓に流水　左は時雨にけむる
（九）雪の積もった緑の松　木下に咲く梅
（十）雪の住吉社　朱の鳥居・反橋・社殿
（九）と（十）はほとんど一個所に描く
（追加）岡辺に藁屋根がのぞく　叢萩の葉



（三）第三の百韻三つ物の図。藁屋の軒端の梅に鶯、粗末な門戸の側に槙、右上には薄い月、左上には遠山の寺院が見える。



（十）第十の百韻三つ物の図。雪の住吉社、朱の鳥居・反橋・社殿。右の雪の積もった松は第九の百韻三つ物から続く。左の藁屋根と萩の群は次の追加の三つ物の図。

以上「天文三好千句三つ物」の出現によって、次のようなことが明らかになる。

①三好長慶が主催した、または中心となった千句連歌は、天文二十年（一五五一）六月の「天文三好千句」、弘治二年（一五五六）七月の「滝山千句」、永禄四年（一五六一）五月の「飯盛千句」の三つがある。偶然であろうが、三つの千句は五年ごとに行われている。

このうち各百韻の発句を見ると、「滝山千句」の発句には摂津国の歌枕が、「飯盛千句」の発句には五畿内の歌枕が詠み込まれている。私は、発句に詠み込まれた歌枕が摂津国から五畿内に発展することには、長慶の勢力拡大にともない、天下の覇者たらんとする長慶の意欲が窺えるのではないかと考えている。[7] しかし三つの千句のうち最初である「天文三好千句」には、まだ領土拡大に結びつくような傾向は窺われない。寿慶が第十の百韻の発句に「つもりの浦」を詠むにすぎない。津守の浦は、大阪の住江や住吉と同じで、堺の津に近い。阿波国を本貫地とする三好氏にとって、堺や住吉の津は阿波から畿内や都に入る第一歩の拠点であった。五年ごとに催された千句の発句に摂津や五畿内の歌枕を詠み込むのはこの「天文三好千句」の第十の百韻の発句が契機になったかもしれない。

②千句三つ物に名を連ねる連衆は、長慶ほか十六名。このうち、寿慶・宗養・昌休は宗匠格で参加している。

後世、秀吉時代に連歌界の指導的地位に就く紹巴は、後で見るように第十の百韻では一巡の最後を詠み、第三の百韻、第五の百韻ともに一句しか詠んでいない。理文も、第五の百韻では一巡の最後を詠み、第三の百韻、第十の百韻ともに一句しか詠んでいない。家順も、第三の百韻では一巡の最後を詠み、第三の百韻、第五の百韻ともに一句しか詠んでいない。紹巴・理文・家順たちは、寿慶や宗養・昌休の許で執筆を勤めるなど、まだ修行の身であった。

③連歌三つ物の後に付けられた絵は、江戸時代に描かれたものと思われるが、絵についての情報はまったくない。三つ物の語彙に従い、三つ物の景色をできるだけ忠実に描こうとしている。江戸時代、俳画は盛んに描かれるが、このように連歌の内容を描こうとした例はあまり知らない。詳しい方のご教示を賜りたい。

以下「天文三好千句三つ物」の紹介を機に、同千句の第三、第五、第十の百韻の翻刻を試みる。

第三と第五の百韻は、書陵部蔵『連歌五種』（三五三―五八　旧桂宮本）一冊に入っている。これは袋綴本で、全四二丁、縦一四・二cm、横二〇・七cm、表紙は渋茶色紙。江戸時代の写本で、題簽に『連歌五種』とあり、以下の九つの作品からなる。

①天文廿年六月十日　第三　賦何船連歌（内題表紙一丁と四丁）
②天文廿年六月十一日　第五　賦初何連歌（四丁）
③賦何手連歌　昌琢・宗帆（ほイ）・昌俔・玄陳ほか（六丁）
④元和九年五月三日　坂田与五衛門興行　賦何人連歌（六丁）
⑤寛文十二年壬六月廿一日　照高院・昌陸・御製三吟（四丁）
⑥「はくはねは（ママ）庭も山路の落葉哉　経廣」（遊紙一丁・四丁）
⑦「すゝこさす鷹の行衛やしたふ覧　嗣良」（三丁）
⑧「時雨しを見するはかりの若葉哉　季吉」（五丁）
⑨延宝九年六月十八日　遍照寺宮第三回忌追善之連歌（四丁）

天文廿年六月十日

第三

賦何船連歌

1（初オ）つけ残せ春くれかたの鐘の声　正悦
2夢路も花のあかつきの空　玄哉
3槙の戸の月にうくひす鳴出て　末満
4かきほのは山かけしつかなり　昌休
5雨はるゝあとや夕にうつるらん　長慶
6けふ吹かせのよさむしらする　寿慶
7打そむるたか一むらのあさ衣　宗養
8うす霧かくれたてるあさちふ　慶牧
1（初ウ）遙なる野路のかたへに日ハさして　寿印
2鳥の音きこえ水の行ミゆ　永薀
3谷の外の朝けの霜やとけぬらん　底翼
4かしけて竹のうちなひくかけ　正種
5送りこし世を侘人のあはれしれ　覚阿
6よしやきえむも身にはまかせす　宥松
7面影のおもひとなるもいかゝせん　理文
8こすまく袖のかひまみハうし　家順
9打しのふすまゐのほともあやしきに　玄哉
10たとるはかりのみちかすかなり　正悦
11行月のかけのハ雪に鹿鳴て　昌休
12さよふけすめる秋かせの声　長慶
13手枕にいかなる露のこほるらん　寿慶
14夏もわすれてはしゐするそて　宗養
1（こオ）なくさめハかたらすあかぬほとなれや　正悦
2しらさりしにもつるゝ山こえ　底閑
3いつ□（か）たの峰の雲にかやとりせん　永薀
4時雨し風のあとはくれけり　昌休
5ちりやらてあられ待とるむら柏　宗養

6 軒の板まハ苔のむすのみ　寿慶
7 事とへとすむ人もなき古寺に　長慶
8 たかかゝけてかのこるともし火　慶牧
9 しられけりハつかなるにも心さし　永蘊
10 とりたに見しの文の中〳〵　紹巴
11 数ならぬ身にしも恋のつらかれや　正種
12 しつはた帯のとけてくやしき　寿印
13 ねし朝こゝろやすくも帰るなる　昌休
14 名残わかすハ月のおもハん　寿慶
1 さらぬたになかめおしけき秋暮て（ニウ）　長慶
2 霜の底なる菊の一もと　宗養
3 仙人のすむ跡いかに尋ねまし　正悦
4 あかむこもなくうちやむかへる　永蘊
5 つれ〳〵をしらぬ心ハならハはや　慶牧
6 御法をわさにあけ暮す山　寿慶
7 後のよをおもはぬこそハおろかなれ　正種
8 つみせしハたゝみるもかなしき　長慶
9 海士舟にあミのこけ縄かけほして　寿印
10 わかすミかとやかへる蘆の屋　底閑
11 蚊遣たく宵すきぬれハ声すなり　昌休

12 たちいてすゝむ月かたふきぬ　正悦
13 花の比いとひしかせハ吹たえて　慶牧
14 秋のこすゑやかすめてもミん　玄哉
1 もすのゑる遠の山本春さひし（ニウ）　宗養
2 夕日をうすみさしすつるかけ　永蘊
3 渡し船つなくむかひや里ならん　長慶
4 葉わけに道のつゝくむら蘆　宥松
5 駒あさる野沢の水の朝ほらけ　寿慶
6 すむもいくかたあらをたの廬　昌休
7 山かつはちかくありてもともなはす　永蘊
8 やハらくいつをこゝろなるへき　底閑
9 しゝまをもこたふるまてとしたひきて　宗養
10 くらふるおもひさもよはらめや　昌悦
11 玉のおのなからんのちもわかうらミ　寿慶
12 あたなるつゆのかゝる葛の葉　永蘊
13 秋ことの月もかはらぬ神かきに　寿印
14 ゑいのかへさも身にしめる里　昌休
1 風あるゝ市路のすゑの暮ふかミ（ニウ）　長慶
2 しハし心はやすめかたしも　正悦
3 よにたれかのそミなくてハなからへん　慶牧

4苔になすこそ袖のたのしミ　宗養
5花の色もおつれハつゐにくちハてぬ　底閑
6日もなかあめのをやミなきころ　覚阿
7春さへもわひしくすめるすまの里　長慶
8山ハこしちのかすみこめたり　正悦
9笛のねの夕かけわたるかけハしに　昌休
10天津おとめはいつかくたりし　永蘊
11常ならぬ色よにほひようす衣　寿印
12風にふれ／＼はちすはの露　寿慶
13行水に影ものこらぬ月出て　宗養
14秋ハほたるのミし跡もなし　昌休
1長きよも窓のまなひのいたつらに（名オ）　宥松
2みたるゝ恋のはていかならん　寿印
3契を□（は）とはすかくいひあたにして　正悦
4しめをく山はよそのかくれ家　慶牧
5咲花や木もとすミのいとふらん　寿慶
6むへもる人もはつ桜とか　宗養
7玉ほこの行手もさよの朝かすみ　昌休
8月はすゑ野にまたのこりつゝ　長慶
9かへるさをゝしむ小鷹のかり衣　玄哉
10ほに出るすゝき折かさすミゆ　寿印
11今ハとや花の萩か枝しほるらん　永蘊
12古里人のたれをまたまし　寿慶
13稀／＼のつてもこの比たえハてゝ　慶牧
14うつし心やかたつきぬらむ　底閑
1詠（名ウ）する明ほの夕春のそら　寿慶
2またれてさくそふかき梅か香　昌休
3はる／＼とかすみにたとるくらふ山　寿印
4つかれて馬のいかに足なみ　正種
5水こほる枯野の霜に日ハくれて　宗養
6みる／＼月の影のさやけさ　玄哉
7むら雲をさそひし風ハ冷しく　長慶
8杉まに霧の残る一かた　宥松

正悦　九　永蘊　九
玄哉　五　底閑　六
末満　一　正種　四
昌休十一　覚阿　二
長慶　十　宥松　四
寿慶十一　理文　一
宗養　十　紹巴　一

慶牧　七　　家順　一
寿印　八

書陵部蔵『連歌五種』所収の第五の百韻の体裁についてはすでに紹介した。この第五の百韻は、前述のように兵庫県伊丹市の柿衛文庫にも所蔵されているので、柿衛文庫本で校合を試みた。柿衛文庫本「第五賦初何連歌百韻懐紙」（整理番号一八三一）は「連歌三巻紹巴・宗祇・宗砌」と上書きした桐箱に収められている。三巻の内、他の一つは「宗祇自筆独吟百韻」（整理番号一八三二）とあるが、文明七年九月廿五日の千句連歌の第九の百韻である。もう一つは「宗砌自筆百韻切」（整理番号一八三三）とあって、享徳三年正月の賦何人連歌の一部である。三巻とも連歌懐紙を巻子に仕立てたもので、紹巴・宗祇・宗砌の自筆とされているように、江戸時代以前の筆致である。「第五賦初何連歌百韻懐紙」の巻子は、縦一六・五㎝、横四一一・二㎝、題簽に「天文俳諧連歌　紹巴筆」とある。

天文廿年六月十一日

第五

賦初何連歌

1 山風やうすらひむすふ夏の海　　宗養
2 磯の玉藻になミのみるふさ　　昌休
3 舟よする真砂の松はかけ暮て　　長慶
4 いり日のしたの雪の一むら　　寿慶
5 たつ鶯の空行つはささむき野に　　底閑
6 手はなす鷹のかけるまちかさ　　覚阿
7 さしはへてみさきハ車こゝろせよ　　玄哉
8 すたれをまけハ月そさやけき　　寿印
1 ミたれちる柳かえたのそよめきに　　永瀘
2 あき風かよふいさゝむら竹　　正悦
3 とふ蛍かけもすゝしく暮そめて　　慶牧
4 蝉のは山のなきすてし声　　宥松
5 岡のへやさひしきみちに立帰り　　家順
6 けふりそしるへかたハらの里　　末満
7 かすかなる橋の一すち霜降て　　理文
8 なかれうちいて駒いはひ行　　紹巴
9 沢水に草葉をしなミ青かれや　　正種
10 けしきも春の野こそ遠けれ　　宗養
11 やすらひに永日くらしあかさらん　　寿慶
12 霞に月をまちやとらまし　　長慶
13 おしめとも木の間ハ花のさ夜あらし　　昌休

14あすハいつくのさくらをかミむ　底閑
1[二オ]たのむかたなき心□□(神こそ)はかなけれ　正悦
2おもひしるをもしたふつれなさ　慶牧
3さても身のかへり見せしを忘きや　永蘊
4人のあやまりさもあらハあれ　寿印
5をしへしもまよふミちこそ旅ならめ　宗養
6名もあふ坂の関やわかれん　昌休
7いつか又都の空とうち侘て　慶牧
8月のちきりも暮て行秋　正種
9ひこほしの待〳〵し夜や夢ならん　底閑
10としにあためく花はあさかほ　寿慶
11うす霧のまかきさひしき風立て　長慶
12かりほハとふもたれかこたへん　永蘊
13ミちのへのひとりの爪木ひろひ出　昌休
14俄にすつる世そあはれなる　正悦
1[二ウ]下染のこゝろハあらんすみの袖　寿慶
2うらみのゆへはたつねしもせし　底閑
3玉さかのあふせなりけるたまくらに　寿印
4ことつくさむもつきぬむつこと　長慶
5つもりこしつらさのほとは月もしれ　宗養
6浦ふりにたる秋のしほかま　昌休
7八十嶋も霧のまかひにほの暮て　永蘊
8あし火のかけそ舟としらるゝ　玄哉
9一むらをわかすむかたとたのむらし　慶牧
10花のかへさのすゑの松はら　長慶
11かけとめて風は梅かゝ過る野に　昌休
12ものうくひすと又やなくらん　寿慶
13おしむてふいく度たひの春の暮　宗養
14くめるかすみのましハりの中　正悦
1[三オ]いとはむとおもひしことやわするらん　正種
2待にハ月もいミかねて見る　昌休
3忍ふとも秋の夕ハたへめやハ　正悦
4わきて身にしむあさちふの露　玄哉
5風かこふ一もとこ萩さくかけに　寿慶
6のこれる虫もいくほとの声　宗養
7玉ほこのすゑ野をとへは冬のきて　長慶
8何をか里ハしるへならまし　正悦
9漕行やミつしほあひの奥つ舟　底閑
10浪にうかへるあハとはるけミ　寿慶
11明わたる西の空こそさやかなれ　覚阿

12秋ちかゝらし風の山窓　宗養
13日くらしの来なくむら竹茂りあひ　昌休
14おちそふものよ木ゝの下露　慶牧
1うつ音も賤かきぬたの草の廬　末満
2せはきたもとはいとゝすさまし　永蘊
3瀧川やしら玉しつく月澄て　寿印
4水のこゝろにこゝろはつかし　昌種
5おとろくハ鏡のかけよわ□（柿ーか）よハひ　寿慶
6いつをたのしむ世とをくりけん　長慶
7をのかためこふるむかしハあらまほし　寿慶
8みとりの色に松そかたふく　底閑
9夕日さす花の雲まの嶺たかミ　宗養
10春やしたひて鳥かへるらん　昌休
11弥生ハたほとゝきすくる二声に　寿慶
12あはれね覚をこゝろある人　寿印
13かなはぬもそのことの葉やおもふらん　正種
14うきふしをたにかたみなる中　宗養
1笛（名ヤ）の音もゆかしきはかり遠さかり　長慶
2木こりのかよふ山ち暮ぬる　寿慶
3朝ほらけはや初雪をふみ分て　永蘊
4旅たつ空はしくれせし比　長慶
5けふことの世ハいつよりか神無月　昌休
6にしきをりかくもみちはの色　寿印
7跡見えて霧ふきなかす川風に　玄哉
8秋さむかれや千とりなく声　宗養
9山のはに在明のかけのかたふきて　慶牧
10鐘はたかすむ里としりなし（柿ーも）　底閑
11あやにくにわかれをいかていそくらん　正悦
12むかへをくりもつらさましれり　昌休
13関の戸ハしるもしらぬもこえ侘ぬ　宗養
14人のこゝろハはかりかたしも　正悦
1いかはかりまなはんとする文ならん（名ウ）　永蘊
2はたものをたつためしなきかハ　末満
3いとミたれ道は風ふく花柳　寿慶
4春の所のかきねならすや　正悦
5しつかにもかすめる霞□（柿ー霞）てふのねて　宗養
6暮ての野ちハあふ人もなき　昌休
7行水の音のミしつゝ残る日に　宵松
8かけひのすゑもたえぬつき〳〵　底閑

宗養十二　正悦　九

昌休十二　慶牧　七
長慶　九　宥松　二
寿慶十一　家順　一
底閑　八　末満　三
覚阿　二　紹巴　一
玄哉　四　正種　五
寿印　六　理文　一
永蘊　七

「天文三好千句」の第十の百韻は、書陵部蔵『賦物連歌天文二〇千句第十』（三五三―三七　旧桂宮本）一冊である。これは袋綴本で、全四丁、縦一三・二cm、横一九・一cm、表紙は渋茶色紙。江戸時代の写本で、前の『連歌五種』の①第三の百韻、②第五の百韻の写本と同筆と思われる。

天文廿年六月十二日

第十

賦御何連歌

1松(初オ)の世をつもりのうらのみ雪哉　寿慶
2寒てしつまるなみ風の声　長慶
3春にけふ空や千さとも明ぬらん　昌休
4うくひすさそふ宿のくれ竹　寿印
5のへハまた消あへぬ霜の下萌に　宗養
6くるれハ月や霜(ママ)をたつぬる　底閑
7われもこそ秋にかりねの草枕　慶牧
8夜の友とやをしねもる声　正悦
1栖(初ウ)をはこの比うとくなしはてゝ　正種
2涼しきかたに立いつる道　永蘊
3憂ことの心はなかす御祓河　玄哉
4いのるにあふせありとこそきけ　覚阿
5言の葉ゝかけ捨られついかゝせん　末満
6人はつれなしたえね玉のを　宥松
7忍ふるも洩なんゆくゑおもひ侘　紹巴
8むかしをしるやなミたこほるゝ　理文
9目覚つゝなかむる月は在明に　家順
10いつなる時そ秋のあかつき　寿慶
11露やなをさひしき物とふかむらん　長慶
12色ミぬ山の杉ふける庵　昌休
13しけミには残て花のさりつへし　寿印
14かすみのおくによふこ鳥なく　宗養

1尋(ニオ)とふ春のかけもやもれぬらん　正悦
2なにはにおもふいにしへのそら　慶牧
3袖こゆる波にいまハたミおつくし　昌休
4こふるしるしのなきそかなしき　永蘊
5おしむなのほともこそあれかこたはや　宗養
6いくよまたるゝ山ほとゝきす　玄哉
7雨きけは明やすき比の明やらて　寿慶
8ともし火のこり月くらき窓　長慶
9誰なれや硯ならせる秋の末　底閑
10野分の後もまたうとき友　寿印
11いかにともとはれとふつき夕にて　慶牧
12わすれぬをこそ中のなからへ　昌休
13とめくるもふかき岩屋のおこなひに　宗養
14声うちそふる嶺の松かせ　寿慶
1万代(ニウ)のためしかはらし三笠山　昌休
2さしてあふくハ猶やまもらん　底閑
3ちかくすむ月のミかほの秋のよに　寿慶
4たらひの水の星そかゝやく　正悦
5いかはかりおき出ぬるやとのゐ人　正種
6春たつけさの九重のうち　宗養
7行とくと霞の衣かくはしみ　長慶
8袖の色もや花にけたれん　昌休
9露なから小萩さく野の村薄　宗養
10吹ぬも秋の風は見えけり　玄哉
11天津雁声を雲まに先たてゝ　永蘊
12しら波かくれ奥のつり舟　寿慶
13さすらへを哀と人につけもやれ　寿印
14憂にいのちのならんとやする　長慶
1くやしさの心くらへにかゝりきて(ニオ)　底閑
2とくあはましをへたてられけり　正悦
3よそめもや関とはうたゝふかすらん　昌休
4おもひの末のいたつらになる　昌種
5風わたるむろのやしまのうす煙　末満
6田上川やあさけよふかき　宗養
7あしろもる比ハ雪さへ打□□て　慶牧
8日をふる冬のさむさなりけり　永蘊
9蓬生のかけにしハふきよろほひぬ　寿印
10かたゐさりなる老のやすらひ　寿慶
11世のうきを外にのミとハおもふなよ　長慶
12捨やらぬまも身ハよしやたゝ　昌休

13かへり見る心こそなをかたからめ　玄哉
14雲のいはへる古郷の山

1花に雁春やあまたに別けん（ニウ）　宗養
2柳かえたに燕みたるゝ　長慶
3河かせものとかにふきてくるゝ日に　底閑
4舟さす袖もおしきたをやめ　慶牧
5契をくかけもはかなしかりやかた　寿印
6一夜の後ハなにをしたはん　正悦
7月ハいま梢の秋の名もしるし　永蘊
8をくらの山やきりの下なる　昌休
9鹿の音は遠近になるゆふへにて　寿慶
10おくて田わさ田かりのこす比　長慶
11かけて住しつか道のへをく霜に　玄哉
12小家かちなるまへの棚橋　宗養
13村竹にひま〳〵けふる水おちて　昌休
14岸のこほりのとくる日の影　寿慶

1白鷺のあさり□（ち）い□（ま）や春ならし（名オ）　正悦
2ふもとのすそ野かすむともなき　永蘊
3ときは木の中にもしるゝ花咲て　底閑
4すたれをまけハかはるなかめは　宗養
5くるゝをも人ハまたてやすくすらん　長慶
6憂もあはれもいかてわかさる　昌休
7急雨のよひのましけき秋風に　慶牧
8みかの月こそ影かすかなれ　理文
9桐のはのおちそふ音もいつきかん　正悦
10あつさやなをもけふことの空　宥松
11蚊はしらにたつる軒はの夕烟　長慶
12うちむかひてハ物もいはれす　寿印
13ぬきゝするもの契りのから衣（〜〜）　永蘊
14なれしよ君やたゝつかへ人　宗養

1ふかくしも親のをしへにまかせきて（名ウ）　昌休
2すくなる道や神もうけまし　長慶
3そのつみのつたへもたゝぬ言のはに　慶牧
4たれかくみしるさほ川の水　寿慶
5香ににほふ露や打ちる梅とミん　正悦
6岩田の苔も若ミとりなり　玄哉
7庭ひろくつくりなしたる春の山　宗養
8折にふれつゝとめるこの殿　寿印
　　昌休

寿慶　十　永蘊　六
長慶十一　玄哉　六

昌休十三　覚阿　一
寿印　八　末満　二
宗養十二　宥松　二
底闕　六　理文　二
慶牧　七　家順　一
正悦　八　紹巴　一
正種　三

天文年間には宗弁に該当する人物は見当たらなかった。

（7）拙稿「滝山千句（三つ物）」前掲、拙稿「飯盛千句」解説『千句連歌集』八　前掲

本稿は円福寺住職平幡良雄師・銚子市文化財審議会委員永沢護吾氏のご厚意によるところが大きい。また外山信司氏のお世話になり、橋本初子氏のご教示を得た。宮内庁書陵部より翻刻を許され、柿衛文庫本で校合した。感謝する次第である。

（つるさき　ひろお／本学非常勤講師　帝塚山学院大学教授）

注

（1）奥田勲氏「連歌作品年表稿」『人文科学科紀要』32　国文学・漢文学X　東京大学出版会　昭和三十九年
（2）木藤才蔵氏『連歌史論考』明治書院　昭和四十八年（増補改訂版　平成五年）
（3）連歌総目録編纂会編『連歌総目録』明治書院　平成九年
（4）拙稿「滝山千句（三つ物）」『中世文学』34　平成元年五月
（5）島津忠夫氏ほか『千句連歌集』八「飯盛千句・大原野千句・高野千句」古典文庫　昭和六十三年
（6）一応『醍醐寺新要録』など醍醐寺の記録を当たった。天文年間より百年ほど前の永享年間には宗辨という人物がいたが、